図書館学会年報

論 文
書誌単位と書誌レヴェル
——目録作業のための覚書—— ............................... 永田 治樹 1
学校図書館について考える
——セント・ケビンズ・カレッジの場合—— ............................... 平賀 増美 10
博物学（昆虫学）の文献索引の作成について ............................... 朝比奈大作 17
福島県における青年図書館の展開過程（2）
——形成期・さまざまな発展論—— ............................... 松本三喜夫 25

研究ノート
引用文献からみた図書館・情報学雑誌の類別 ............................... 津田 良成・武者小路信世
岡沢 和世・田村 俊作
三輪真枝子・林 孟真 34

アゴラ
大学図書館と「学術情報システム」 ............................... 金子 豊 45

会 報 ............................... 24

通巻 号 日本図書館学会編集・発行
引用文献からみた図書館・情報学雑誌の類別*

津田良成・武者小路信和**
岡沢和世・田村俊作**
三輪真木子・林孟真**

本論文は慶應義塾大学図書館・情報学研究室で
行っている『図書館・情報学文献構造研究』の中間報告
である。このプロジェクトは引用文献分析の手法を用い
て図書館・情報学文献の構造及び図書館学と情報学の相
互関係を解明しようとするものである。

今回行った調査は研究計画の一部であり、調査結果に
ついても検討の余地を残しているが、これまで直線的に
考えられてきた図書館・情報学雑誌の位置づけに大きな
役割を果たすものと思われる。

今回の調査では、欧文の主要指針12誌を2つの分野す
なわち図書館学分野と情報学分野に分類し、各雑誌の引
用している文献を抜き出した。得られた引用データにも
とづいて、二分野間の情報の流れ及び個々の分野の引用
文献の特徴を明らかにしようと試みた。

1. 調査方法・対象

本調査で用いた調査方法は、文献に引用された引用文
献を計量的に分析する引用文献分析（citation analysis）
である。この手法は1927年にGrossとGrossによって
初めて用いられたものである。**これには、文献を媒体と
する情報の流れを分析して科学の特性を明らかにする
手段として、同時に又、有効な研究資料収集の指針と
して、近年各国で盛んに用いられるようになった。

引用文献分析に関する論文は1960年以降急速に増加し
ている。特にInstitute for Scientific Information（ISI）
よりScience Citation Index及びSocial Sciences Citation Indexのデータベースが発行されて以来、大
量のデータをもとにした研究がGarfieldやNarinらに
よって行われている。今回の調査で用いた方法は、主と
してNarinらによる一連の研究の手法を参考にしたもの
である。

Narinらは、1972年及び1973年に発表した3図
文**で、Journal Citation Indexから抽出した
Journal Citation Indexの引用文献データの分析を行
った。多分野の学術雑誌と、その雑誌に掲載された論文
に引用されている雑誌との間に、「分野内、及び異分野に
またがる二段式流れ」という作成された。又、各分野内、及
び異分野の雑誌の引用関係にもとづいた情報の流れが示
された。一方、同じデータを用いて個々の雑誌の他雑誌
からの引用の、全雑誌引用に対するパーセンテージにも
とづいて、雑誌が主集団のクラスターに分割された。
又、情報の流れと主集団サイズのクラスターの比較が行われた。

Narinらが1976年に発表した論文**では、対象を生物
医学分野とし、先の論文を基盤にして更に進んだ調査方
法を採用している。この論文では、分析を始め前に分類
表が作成された。分類表作成の目的は、大量の出版物信
息を要約し、分析対象を管理できる範囲に制限するためで
ある。分類表に従って分析対象雑誌50誌が5分野、4レ
ベルに分類された。この4レベルは、最も基本的なもの
（臨床医療）から最も基礎的なもの（基礎生物学研究）
までを分割したものである。この分類にもとづいて情報
力値が算出された。情報力値とは情報の相関度合い、論文数、論文の長さ、雑誌全体の影響力の4つのファクター
から算出されたものである。これらで得られた情報力値
はレベルの重みづけに応用され、各レベル間の相互関係が
図に示された。次に情報関係の影響力を分析するた
めに外部との相互関係が調査された。最後に以上の分
析結果をもとに各分野と各影響力図を作成した。

さらにNarinらは、1978年にこの方法を心理学分野に
応用し、この分野における雑誌のレベルと情報力の間に
強い相関関係が存在することを明らかにした。

図書館・情報学を対象とした引用文献分析も多い。
GilchristとDaisleyは、主に図書館・情報学の抄
録サービスの評価を行っている。Gilchristは主な図書
館・情報学雑誌8誌（対象期間：主として1960～64年）を
対象に、Daisleyは5誌（対象期間：1971年）を対象に、
引用文献を分析している。他方とも、二段式流れ図の作
成や相互引用にもとづいた雑誌間の情報の流れに言及し
たものではないが、各雑誌の引用度数の高い複引用雑誌
のリストが示されているので、今回の調査との関連で参
考になるようにと思われる。

* 1980年3月12日 受理
** つだ よしもと、しまとうじょう のゆうす、おかさね かずよ、たむら しゅんじん、みつ まきこ、もうしん、慶應義塾
大学文学部図書館・情報学科


<table>
<thead>
<tr>
<th>略称</th>
<th>雑誌名</th>
<th>講演文数</th>
<th>引用総数</th>
<th>一読本文あたりの平均引用件数</th>
<th>発行頻度</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>JASIS</td>
<td>Journal of the American Society for Information Science</td>
<td>30</td>
<td>432</td>
<td>14.4</td>
<td>隔月刊</td>
</tr>
<tr>
<td>J D</td>
<td>Journal of Documentation</td>
<td>21</td>
<td>500</td>
<td>23.8</td>
<td>季刊</td>
</tr>
<tr>
<td>IP &amp; M</td>
<td>Information Processing &amp; Management</td>
<td>40</td>
<td>383</td>
<td>9.6</td>
<td>月刊</td>
</tr>
<tr>
<td>Aslib</td>
<td>Aslib Proceedings</td>
<td>44</td>
<td>188</td>
<td>4.3</td>
<td>月刊</td>
</tr>
<tr>
<td>S L</td>
<td>Special Libraries</td>
<td>69</td>
<td>352</td>
<td>5.1</td>
<td>月刊</td>
</tr>
<tr>
<td>JLA</td>
<td>Journal of Library Automation</td>
<td>17</td>
<td>192</td>
<td>11.3</td>
<td>季刊</td>
</tr>
<tr>
<td>Libri</td>
<td>Libri</td>
<td>20</td>
<td>427</td>
<td>21.4</td>
<td>季刊</td>
</tr>
<tr>
<td>CRL</td>
<td>College and Research Libraries</td>
<td>30</td>
<td>651</td>
<td>21.7</td>
<td>隔月刊</td>
</tr>
<tr>
<td>L Q</td>
<td>Library Quarterly</td>
<td>19</td>
<td>312</td>
<td>16.4</td>
<td>季刊</td>
</tr>
<tr>
<td>LRTS</td>
<td>Library Resources and Technical Services</td>
<td>26</td>
<td>590</td>
<td>22.7</td>
<td>季刊</td>
</tr>
<tr>
<td>L T</td>
<td>Library Trends</td>
<td>45</td>
<td>1264</td>
<td>28.1</td>
<td>季刊</td>
</tr>
<tr>
<td>L J</td>
<td>Library Journal</td>
<td>67</td>
<td>295</td>
<td>4.4</td>
<td>隔週刊</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表1 調査 対象 雑誌

本調査ではNarinらの用いた二段式流れ図を応用し、図書館・情報学分野の文献情報の流れを明らかにするとともに、研究成果を評価する方法を模索したいと考えている。

Narinらによって提唱された「文献を研究レベルによってマッピングする」という仮説にもとづいて、以下の方法に従って調査を行った。
A. 相互引用の二段式流れ図の作成
B. 相互引用マトリックスの作成
C. 全雑誌引用に対する引用頻度の調査
D. 引用文献の形態による分析
E. 引用年による分析
F. 他分野の雑誌からの引用比率の調査


調査対象期間は、1976年1年分に限った。これは、今回の調査はマスター・サーベイであり、今後必要に応じて調査対象期間を拡大していこうと考えたため、又、本学科図書室の雑誌の保管状況による。

次に、選択された6誌の1976年1年間の引用文献を調査した結果引用頻度の高い6誌を選び対象に加え、計12誌を今回の調査対象雑誌とした。

調査対象雑誌名、略称、各誌の年間引用文献数、引用総数、発行頻度、及び一読本文あたりの平均引用件数が表1に示されている。この表から明らかであるように、対象12誌には季刊のものから隔週刊のものまで発行頻度にかなりの幅があるが、研究論文を掲載している雑誌とニュース性の高い記事を掲載している雑誌があり、論文の長さに違いがみられるため、掲載論文数にもかなりの幅がみられる。当然のことながら、引用総数は少ないもの（188件）から多いもの（1,264件）まで、6倍以上の幅がみられる。Narinらの研究では、引用件数を一定（50件）にして分類を行っているが、今回の調査では手作業ということもあり、このような幅は考慮に入れなかった。

2. 調査結果の分析
A. 相互引用の二段式流れ図
まず、調査対象雑誌12誌の引用文献から引用頻度の高い被引用雑誌、即ち引用されることの多かった雑誌の上位2誌をもとめた。
この結果にもとづいて相互引用の二段式流れ図を作成した（図1）。実線の矢印はその雑誌が最も多く引用した雑誌を、点線の矢印は二番目に多く引用した雑誌を指して、調査対象の12誌は図中に二重線で囲んで示されている。
この図では文献の送り手と受け手という形で雑誌間の相互関係が示されている。ここで、実際の情報の流れは矢印の示す方向とは逆であることを指摘しておく。
二重線で囲まれた調査対象雑誌12誌以外の雑誌には、Bibliograficheskaia Istoristiaというソビエトの図書館学雑誌や、Physics Bulletinのような他分野の雑誌など、やや馴染みのうすい雑誌も入っている。Journal of
<table>
<thead>
<tr>
<th>利用している</th>
<th>JASIS</th>
<th>J D</th>
<th>IP&amp;M</th>
<th>Aslib</th>
<th>S L</th>
<th>JLA</th>
<th>Libri</th>
<th>CRL</th>
<th>L Q</th>
<th>LRTS</th>
<th>L T</th>
<th>L J</th>
<th>分野</th>
<th>利用度</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>利用している</td>
<td>52</td>
<td>21.4</td>
<td>24</td>
<td>1</td>
<td>16</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>IS 33.7</td>
<td>66.1</td>
</tr>
<tr>
<td>J D</td>
<td>40</td>
<td>29</td>
<td>5</td>
<td>10</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>IS 27.7</td>
<td>55</td>
</tr>
<tr>
<td>IP&amp;M</td>
<td>14</td>
<td>19</td>
<td>37</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>IS 13.1</td>
<td>36.2</td>
</tr>
<tr>
<td>Aslib</td>
<td>0</td>
<td>9</td>
<td>3.5</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>1.2</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>IS 3.5</td>
<td>26</td>
</tr>
<tr>
<td>S L</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>17</td>
<td>19.3</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>1.2</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>LS 1.5</td>
<td>33.6</td>
</tr>
<tr>
<td>JLA</td>
<td>4</td>
<td>1.6</td>
<td>3.5</td>
<td>3</td>
<td>1.4</td>
<td>1</td>
<td>1.2</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>LS 3.0</td>
<td>33.2</td>
</tr>
<tr>
<td>Libri</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1.1</td>
<td>0.6</td>
<td>2.9</td>
<td>2.3</td>
<td>2.4</td>
<td>1.0</td>
<td>2.5</td>
<td>33.7</td>
</tr>
<tr>
<td>CRL</td>
<td>6</td>
<td>2.5</td>
<td>1</td>
<td>0.8</td>
<td>0</td>
<td>4.8</td>
<td>3</td>
<td>2.9</td>
<td>19.1</td>
<td>1.6</td>
<td>3.8</td>
<td>1.5</td>
<td>LS 2.5</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>L Q</td>
<td>4</td>
<td>1.6</td>
<td>1</td>
<td>0.4</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1.2</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>1.5</td>
<td>0</td>
<td>LS 6.3</td>
<td>35.7</td>
</tr>
<tr>
<td>LRTS</td>
<td>3</td>
<td>1.2</td>
<td>0</td>
<td>0.4</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0.8</td>
<td>1</td>
<td>16</td>
<td>1</td>
<td>5.2</td>
<td>31</td>
<td>LS 8.2</td>
<td>37.3</td>
</tr>
<tr>
<td>L T</td>
<td>1</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>1</td>
<td>0.4</td>
<td>1</td>
<td>2.4</td>
<td>0.4</td>
<td>16</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>LS 4.8</td>
<td>24.7</td>
</tr>
<tr>
<td>L J</td>
<td>1</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0.4</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>3.3</td>
<td>2</td>
<td>6</td>
<td>1.5</td>
<td>1.5</td>
<td>1.5</td>
<td>LS 41.9</td>
<td>65.9</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>112</td>
<td>154</td>
<td>141</td>
<td>53</td>
<td>92</td>
<td>59</td>
<td>120</td>
<td>91</td>
<td>97</td>
<td>261</td>
<td>256</td>
<td>89</td>
<td>65.9</td>
<td>85.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>
実績：数多く引用された雑誌：
点検：数多く引用された雑誌

the American Society for Information Science (JASIS) と Library Journal (LJ) の2誌に矢印が集中していることは、これら2誌が他の雑誌によって高く評価されていることを示している。1976年はアメリカ図書館協会（ALA）の創立100周年にあたっており、Library Trends (LT), Library Quarterly (LQ) および College and Research Libraries (CRL) にアメリカの図書館史に携わる記事が多く発表されたために、当時から存在していた Library Journal (LJ) に引用文献が集中したのではないかと考え、1966年以前の引用文献を除いて集計してみたが、ほぼ同様の結果を得たことを指摘しておく。

B. 相互引用マトリックス

次に、調査対象の12誌に限り、相互引用マトリックスを作成した。これが図2に示されている。マトリックスの各々のセルの左上の数字は、その雑誌からの引用件数を示し、右下の数字は、雑誌引用総数に対する個々の雑誌からの引用のパーセンテージを示している。例えば Information Processing and Management (IP & M) は、Journal of the American Society for Information Science (JASIS) から、24回引用しており、それは、
て情報学への依存度が高まり、逆に右寄るにつれて図書館学への依存度が高くなっている。

その結果、最も情報学寄りの雑誌で引用率の高いものとして、*Journal of the American Society for Information Science* (JASIS) が左上部に、次に図書館学寄りの雑誌で引用率の高いものとして、*Library Journal* (LJ) が右上部に、それぞれ明確に位置づけられた。


新たに示される*Library Journal* 自体が、研究指向ではない「ニューズ」性の高い雑誌であり、又、*Library Journal* が最も多く引用されている*American Libraries* がニュース雑誌であることからも、図書館学寄りの分野では、基礎研究にあまり力を注がれていないように思われる。

C 自誌引用率

表 2 から自誌引用率の部分だけを出し、雑誌引用総数に対する自誌引用数のパーセンテージを、自誌引用項目および示したものが表 3 である。

Narin の研究では個々の雑誌についての自誌引用率には言及していないが、各研究レベルの雑誌の自己レベル引用を示用するパーセンテージを自己レベル引用率として示している。普通自己レベル引用率は他のレベルの引用率よりも高く、一レベル上でのレベルの引用率が自己レベル引用率を次いで高く、次に一レベル下でのレベルの引用率が高いとされている。これを図書館・情報学雑誌に応用した。

情報学寄りの雑誌として位置づけられた 4 項目のうち

<table>
<thead>
<tr>
<th>雑誌</th>
<th>引用項目</th>
<th>引用総数</th>
<th>自誌引用率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>JASIS</td>
<td>52 (1)</td>
<td>243</td>
<td>21.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>Aslib</td>
<td>17 (1)</td>
<td>88</td>
<td>19.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>CRL</td>
<td>58 (2)</td>
<td>304</td>
<td>19.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>IP &amp; M</td>
<td>37 (1)</td>
<td>214</td>
<td>17.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>L J</td>
<td>23 (1)</td>
<td>135</td>
<td>17.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>S L</td>
<td>25 (1)</td>
<td>168</td>
<td>14.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>JLA</td>
<td>15 (1)</td>
<td>101</td>
<td>13.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>LRTS</td>
<td>52 (1)</td>
<td>396</td>
<td>13.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>JD</td>
<td>29 (2)</td>
<td>260</td>
<td>11.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>LT</td>
<td>22 (6)</td>
<td>540</td>
<td>4.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>LQ</td>
<td>4 (6)</td>
<td>127</td>
<td>3.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>Libri</td>
<td>5 (8)</td>
<td>193</td>
<td>2.6%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*Journal of Documentation* (JD) を除く 3 項目は、ともに自己引用率が最も高い。又、*Journal of Documentation* (JD) と、*Library Quarterly* (LQ) は 6 項目である。これら 3 項目は、情報学寄りの雑誌の引用の特性を示す特徴であるといえよう。

D 引用文献の形態による分類

引用文献の形態を*「雑誌」、「図書」、「レポート」、「会議録」、「その他*与大別し、各形態の引用数とその引用率に対するバーセンテージを各雑誌ごとに集中し、個別の引用とした方が図 3 である。なお、*「その他* にはマニュアル書、参考図書、出版予定、ミーティング、特定、特許、雑誌、学位論文、ウェビック、公文書、新聞、メッセージ、ソフウェア、プログラミングを含んでいる。

図 3 では自誌引用の占める割合の多い雑誌から順に左から順に並べられている。*Library Resources and Technical Services* (LRTS) が 67.1% と雑誌を最も高いパーセンテージで引用しており、二位の*Information Processing and Management* (IP & M) の雑誌引用率 (56.4%) で大きく引きはなされている。

しかし、*Library Resources and Technical Services* は毎年第 3 号がいくつかのレビュー論文だけを掲載されているので、そのための引用を受けていているとも考えられる。そこで第 3 号のレビュー論文を除いて*Library Resources and Technical Services* の雑誌引用率を求めたところ、雑誌引用総数は 96 件で、これ自誌引用数は 23 件で、それぞれ引
（195件）の49.2％となり、誌以外の引用が誌引用を優かに上まわっている。これを図3と比較すると、Library Resources and Technical Servicesのレビュー論文を除いた誌引用率は、Journal of Documentation（JD）とSpecial Libraries（SL）の間に位置づけられる。

図3を全体的にみると、情報学寄りの誌は誌引用率が50％をやや上まわっている。一方、図書館学寄りの誌は、誌引用率が50％以下である。この結果から、情報学寄りの誌は図書館学寄りの誌より誌引用に依存する割合が高いといえよう。

E. 引用誌の出版年分部
引用文献中の誌引用について、被引用誌の出版年、すなわち、引用文献の年号を調査した結果を棒グラフに示したものが図4である。

図4では、1971年から1976年の6年間に出版された被引用誌が最も多く、1977年以降は減少傾向にある。
引用雑誌文献の全雑誌引用に占める割合の小さい頃に雑誌が並べられている。


図 5-A 被引用雑誌の主題分布，情報学雑誌グループ（JASIS, JD, IP & M, Aslib）
Library Trends (LT), Library Quarterly (LQ),
College and Research Libraries (CRL) の 1967 年以
降の被引用雑誌文献の割合が少ない要因のひとつに、こ
れら 3 誌が歴史的な主題の文献を多く掲載している点が
指摘できる。特に調査対象年である1976年がアメリカ
図書館協会（ALA）の創立100周年にあたっているため
の影響も考えられる。

一方、Library Resources and Technical Services
(LRTS), Journal of Library Automation (JLA),
Library Journal (LJ), Special Libraries (SL) にお
いても、1967年以降の被引用雑誌文献の割合が多い要因と
して、以下の点が指摘できる。

Journal of Library Automation は、主題がカレン
トなものであるため、引用文献も当然新しいものが多い。
Library Resources and Technical Services は、
同様に指摘したとおり第 3 誌にレビュー論文を掲載して
いる。又、これら 2 誌はともに、テクニカルな内容やイ
ノベーションに関する記事が多い点もあげられよう。ま
た Library Journal はニュース性の高い記事も多く掲
載していることも指摘できる。

Libri を例外として、情報学寄りの4誌がちょうど中
間にまとまっていることは興味深い点である。

F. 被引用雑誌の主題分布

調査対象の12誌について、引用されている雑誌の所属
する主題分野を、Ulrich's International Periodicals
Directory の主题分類に従って分類した。このようにし
て、各雑誌が引用している雑誌の主題分野別の分布状況
を調査した。次に、相互引用を調査する際に作成した図
2、すなわち、各雑誌のが引用学説情報学のどちらによ
り強く依存しているかを示した図にもとづいて、調査対
象の12誌を情報学雑誌、図書館学雑誌及び中間性に位置す
る雑誌の3グループに分類した：Journal of the Ame-

図 5-B 図書館学雑誌グループ (LQ, LRTS, LT, LJ)
図 5-A は、情報学雑誌グループの4誌に引用された雑誌の主題別分布を示している。情報学雑誌グループでは図書館・情報学雑誌からの引用が55.7％であり、これは3グループの中で最も低い。社会科学分野では、経営学・経済学と心理学雑誌を多く引用している。自然科学分野では、自然科学一般、医学（Health Sciences）雑誌を多く引用している。又、コンピュータ分野からの引用は14.5％で、この数字は図書館・情報学分野に次いで2番目に高い。

図 5-B は、図書館雑誌グループの4誌に引用された雑誌の主題別分布を示している。図書館雑誌グループでは、図書館・情報学雑誌からの引用が78％であり、情報学雑誌グループの場合より大きい。又、音楽、美術などの芸術・人文科学や、地理学、経営学・経済学の雑誌を多く引用しており、自然科学およびコンピュータ分
表 4 被引用雑誌の主題分布

<table>
<thead>
<tr>
<th>DDC</th>
<th>引用している雑誌</th>
<th>情報学雑誌グループ</th>
<th>中間雑誌グループ</th>
<th>図書館学雑誌グループ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>JASIS・JD・IP&amp;M・Aslib</td>
<td>SL・JLA・Libri・CRL</td>
<td>LQ・LRITS・LT・LJ</td>
</tr>
<tr>
<td>020</td>
<td>Library &amp; Information Sci.</td>
<td>448件 55.7%</td>
<td>643件 86.2%</td>
<td>934件 78.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>100</td>
<td>Philosophy &amp; Religion</td>
<td>2 0.2</td>
<td>0 0</td>
<td>2 0.2</td>
</tr>
<tr>
<td>150</td>
<td>Psychology</td>
<td>9 1.1</td>
<td>0 0</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>300</td>
<td>Social, Sciences</td>
<td>1 0.1</td>
<td>1 0.1</td>
<td>6 0.5</td>
</tr>
<tr>
<td>301</td>
<td>Sociology</td>
<td>10 1.2</td>
<td>2 0.3</td>
<td>1 0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>310</td>
<td>Statistics</td>
<td>5 0.6</td>
<td>1 0.1</td>
<td>1 0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>320</td>
<td>Political Science</td>
<td>3 0.4</td>
<td>1 0.1</td>
<td>8 0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>330</td>
<td>Business &amp; Economics</td>
<td>15 1.9</td>
<td>23 3.1</td>
<td>25 2.1</td>
</tr>
<tr>
<td>340</td>
<td>Law</td>
<td>0 0</td>
<td>4 0.5</td>
<td>8 0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>350</td>
<td>Public Administration</td>
<td>1 0.1</td>
<td>3 0.4</td>
<td>5 0.4</td>
</tr>
<tr>
<td>360</td>
<td>Social Welfare</td>
<td>0 0</td>
<td>2 0.3</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>370</td>
<td>Education</td>
<td>2 0.2</td>
<td>20 2.7</td>
<td>14 1.2</td>
</tr>
<tr>
<td>400</td>
<td>Linguistics</td>
<td>1 0.1</td>
<td>0 0</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>500</td>
<td>Natural Sciences</td>
<td>61 7.6</td>
<td>7 0.9</td>
<td>9 0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>510</td>
<td>Mathematics</td>
<td>4 0.5</td>
<td>0 0</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>530</td>
<td>Physics</td>
<td>8 1.0</td>
<td>1 0.1</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>540</td>
<td>Chemistry</td>
<td>41 5.0</td>
<td>10 1.3</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>570</td>
<td>Biology</td>
<td>5 0.6</td>
<td>0 0</td>
<td>1 0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>610</td>
<td>Health Sciences</td>
<td>26 3.2</td>
<td>7 0.9</td>
<td>3 0.3</td>
</tr>
<tr>
<td>620</td>
<td>Engineering</td>
<td>7 0.9</td>
<td>3 0.4</td>
<td>1 0.1</td>
</tr>
<tr>
<td>621</td>
<td>Electricity &amp; Computer</td>
<td>117 14.5</td>
<td>14 1.9</td>
<td>7 0.6</td>
</tr>
<tr>
<td>681</td>
<td>Instrument</td>
<td>1 0.1</td>
<td>0 0</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>700</td>
<td>Music &amp; Art</td>
<td>0 0</td>
<td>0 0</td>
<td>18 1.5</td>
</tr>
<tr>
<td>800</td>
<td>Literature</td>
<td>2 0.2</td>
<td>10 1.3</td>
<td>8 0.7</td>
</tr>
<tr>
<td>900</td>
<td>History</td>
<td>1 0.1</td>
<td>2 0.3</td>
<td>10 0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>910</td>
<td>Geography</td>
<td>2 0.2</td>
<td>1 0.1</td>
<td>0 0</td>
</tr>
<tr>
<td>不明</td>
<td>11 1.4</td>
<td>6 0.8</td>
<td>29 2.4</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

雑誌引用総数 805件 100% 746件 100% 1198件 100%

野の雑誌の引用は少ない。

図 5- C は計画に位置づけられた中間雑誌グループの 4 話に引用された中間雑誌の主題別分布を示している。中間雑誌グループでは、図書館・情報学雑誌からの引用は 86.2% で、これは 3 グループのなかで最も高い。このグループでは、経営学・経済学および文学分野の雑誌が比較的多く引用されている。

個々の雑誌グループの各主題分野の雑誌からの引用のパーセンテージがその分野への依存度を示すと考えるならば、図書館・情報学への依存度は中間雑誌グループが最も高く、情報学雑誌グループが最も低い。この結果から、情報学雑誌グループは図書館学雑誌グループよりも主題のひらがりが大きいといえよう。

3. 結 論

以上の調査結果から、情報学雑誌と図書館学雑誌の引用文献には次のような違いがみられることを明らかになった。

の低いものが多いこと。第4節に、引用文献の形態について、雑誌からの引用の総引用件数に占める割合に違いがみられたこと。また、情報学雑誌では雑誌からの引用のパーセンテージが50%を越えているのに対して、図書館学雑誌では雑誌からの引用は50%以下であった。第5節に、被引用雑誌の出版年分布について、情報学雑誌は4誌とも同様の分布を示したが、図書館学雑誌は歴史的なものと、カレントなもの二つのグループに分かれる。第6節に、被引用雑誌の主題分布について、情報学雑誌は図書館・情報学への依存度が相対的に低く、自然科学およびコンピュータ分野への依存度が高い。一方、図書館学雑誌は図書館・情報学への依存度が相対的に高く主題の広がりが小さい。又、人文・社会科学への依存度が高いが、自然科学やコンピュータ分野への依存度は低い。

以上の通りから、情報学雑誌と図書館学雑誌の特徴として、情報学雑誌では階層関係が必ずしも強くなっているのではなく、雑誌間の情報の流れがみられるのに対して、図書館学雑誌には階層関係が存在せず、ニュース性の高いLibrary Journalは他誌が依存していることを指摘できるよう。

今回の調査では1年分の引用文献を対象として、個々の雑誌の総引用件数が異なっているので、この調査結果だけにとづいて結論を出すのは早計であるかもしれない。しかし、少なくとも今回の調査結果からは、情報学雑誌には階層関係がみられる雑誌を研究レベルに分類できるが、図書館学雑誌にはそのようなレベルは存在していないといえよう。図書館学には基礎研究が少ないといわれているが、今回の調査結果もこれに反しているように思われる。

注